

ふるさとセンターに

もつと時間を

石田かずみリポーター



年会議所なので、もう少し若者が足を運んでくれる、普段で参加できるようなソフトなものでも良いと思います。

シンポジウムと名のつくものに参加するのは初めてでした。昨年の一回目にもそれなりの興味はあったのですが、私の足は向きませんでした。

これは大館に限らず言えることだと思いますが、このような催しに若者の姿が少ないようです。特に今回のシンポジウムは主催が青



▲写真左から、コーディネーターの渡辺靖彦氏、パネリストの浜松商工観光課長、一戸見氏、村山健一氏、越後国行氏。

第2分科会

「大館の観光拠点づくり」

—ふるさとセンターは観光拠点となりうるか—

私たち大館市民が、日常どっぷりとつきりすぎて盲目的になっている生活の中に、気づかずにいる点があることを示唆するパネリストの発言は、意義のあるものでした。私たちにあって、第三者的に外から大館を見つめてみることは、とても大切なことだと思います。話は前後しますが、私の参加した第二分科会は「大館の観光拠点づくり」(ふるさとセンターは観光拠点となりうるか)がテーマでし

た。けれども、渡された資料を見ると何かにでもあるような内容で、もう少し工夫して欲しい気分になりました。そんな中で「ふるさとセンターの構想を含めて、昨今パンパン造られている公共施設は、本当の意味での市民の立場で造られているのか」といった内容の発言が、青年会議所からのパネリスト越後氏からありました。ふるさとセンターはもつと十分な時間をかけ、市民を交えた話し合いをよって、煮詰めるべきでしょう。

他所者気分 で観光プランを

川上理佳リポーター

たとえば(シーズンに関係なく)一泊二日の大館観光プランをたててみましょう。時間のスケジュールの中に、かなりの空白が出てくるのではないのでしょうか。また、世代別にプランをたてるとなると、一層むずかしくなるような気がします。



点が多くありました。中でも、視点を交えてみることの大切さと、広い視野で物事を見ることの重要性は、あらためて認識させられました。

これからもこのようなシンポジウムを何度となく開催し、ふるさとセンターひとつをとっても、地方的な発想だけでなく、市民はもちろん、各方面で活躍している方たちにも参加してもらい、よりグローバルな視野を持つべきだと思います。また、今の大館にはシンポジウムの規模の大小よりもその開催数を増やすこと、激論飛び交う場を増やすことが必要なのではないでしょうか。

「どうやって大館まで行くのですか」
交通の便の悪さは既知のことです。大半の人は東北新幹線を利用すると思われませんが、盛岡・大館間の「足」には、不満が多いと聞きます。

「きりたんぼを食べた後どうしようか」
本当にどうしようか。修学旅行生が、手作りきりたんぼに感動したと聞きますが、観光客みんなが手作りにトライできるのでしょうか。また、ほかに何をこころうしましょうか。

秋田大会館見学のほかに、「ハチ公物語」の感動を伝えることができるのでしょうか。

「買いたい物がありますか」
おみやげとして「曲げわっぱ」は有名ですが、観光客は、おみやげを買うのに加えて、その街の雰囲気を感じたくて商店街へ出向きます。普通はこれに時間がかかるものですよ。

「観光」とはたぶん、時代とともにニーズが変わってゆくものだと思います。

今回のシンポジウムにおいて、私は「大館の観光拠点づくり」(ふるさとセンターは観光拠点となりうるか)と題した第二分科会に参加しましたが、他市からの講師・コーディネーター、パネリストのお話に、妙にうなずいてしまいました。大館市民にとっては、皮肉にもとれる辛言・甘言がありました。

「ハチ公物語がヒットしている中にいて、手をこまねいてはいませんか。」
「ないないづくしの街にあっても、おっとり構えていられる皆さんは、かえってたいしたものだとも思えますね。」
これらは、そのまま観光客の不満でもあるのではないのでしょうか。

ふるさとセンターの「ふるさと」は、観光客の視点からもみていかななくては、単なる「市民憩いの広場」になってしまふような気がします。もしかすると「秋田犬、曲げわっぱ、きりたんぼ」以外の何かを、観光客は私たち大館市民に求めているのかもしれない。どうか自己満足的な「ふるさと」になりませんように。また、大館に足りない「何か」の部分、しっかりと把握することができまふように。

「秋田犬を見たのですか」
本当にどうしようか。修学旅行生が、手作りきりたんぼに感動したと聞きますが、観光客みんなが手作りにトライできるのでしょうか。また、ほかに何をこころうしましょうか。